

研究者：北村 優依（所属：愛知学院大学 短期大学部 歯科衛生学科）

研究題目：歯科衛生士の勤務状況と必要性が拡大している歯科衛生士業務 に対する意識の関連

目的：

歯科衛生士業務は、訪問歯科診療業務や周術期、有病者の対応など専門的な業務範囲が拡大しており、それに対して教育が後追いしている現状がある。現在、勤務する歯科衛生士はこれらの業務の専門的な教育を受けていない者もあり、業務に関する意識は勤続年数や勤務場所等の状況により多様化していると思われる。また、歯科衛生士による浸潤麻酔の適否が問われている中、昨今では歯科衛生士による浸潤麻酔を実施している歯科診療所の存在が認められ、日常的な歯科診療行為についても十分な教育がないまま拡大している業務があると言える。しかし、現在のところ実際の歯科衛生士の勤務状況と意識に関する報告は未だない。本研究では、歯科衛生士の勤務状況と業務に対する意識の関連を分析し、学生教育やリカレント教育としての歯科衛生士業務を検討することを目的とした。

研究方法：

1) 対象および方法

A 専門学校ならびに A 短期大学卒業生 1,542 名に対し、調査に関する説明文書、web アンケートの入力フォームを郵送し、回答によって調査への同意を得た。配布および回答期間は 2022 年 11 月～2023 年 1 月に行った。

2) 調査項目

(1) 基本項目

①年齢、②卒業年度、③歯科衛生士歴、④現在の主な就労場所、⑤主な就労場所で行っている業務内容の 5 つを基本項目とした。基本項目④、⑤の詳細について下記の表に示す。

項目	選択肢
④就労場所	診療所、病院・大学病院、障害者歯科診療所等、介護保険施設等、歯科衛生士教育養成機関、行政、歯科検診・保健活動機関、社会福祉施設、研究機関、地域包括支援センター等、歯科衛生士として勤務していない、その他
⑤業務内容 ※複数選択	全身モニタリング、嚥下機能検査、舌圧検査、要配慮者への栄養指導、義歯の調整・研磨、補綴物の合着、口腔ケアプランの作成、口腔乾燥の検査、カンファレンス等への参加、食事介助、X 線撮影、歯肉粘膜等への薬物塗布

(2) 追加項目

基本項目④の質問において、「歯科衛生士として勤務していない」以外を回答した場合、追加項目 A を、「歯科衛生士として勤務していない」と回答した場合は追加項目 B を実施し、詳細を下記の表に示す。

追加項目	概要
A	下記の a～h の業務について、業務の実施の有無、自信度、重要度、教育の必要性の認識を 4 件法で調査した。 a. 精密印象採得、b. SRP 時の浸潤麻酔、c. SRP 時以外の浸潤麻酔、d. 採血、e. 注射、f. 口腔機能管理（直接・間接）、g. 咽頭部及び気管内吸引、h. 在宅（施設・病棟を含む）での口腔ケア
B	・ 歯科衛生士としての復職を考えているか ・ A 短期大学における「歯科衛生士リカレント研修センター」を知っているか ・ A 短期大学における「リカレント研修プログラム」に参加したいか

3) 統計解析

SPSS 28.0 (IBM Corp, Armonk, NY, USA) を用いて集計ならびに歯科衛生士歴と各業務の実施状況のクロス集計、浸潤麻酔の実施状況と自信度・重要度・必要度のクロス集計と χ^2 検定を行った。

結果および考察：

アンケートへの有効回答数は 218、回収率は 14%であった。

(1) 年齢 (図 1)

年齢は、20～25 歳 38 名 (17.4%)、26～30 歳 39 名 (17.9%)、31～35 歳 48 名 (22.0%)、36～40 歳 24 名 (11.0%)、41～45 歳 37 名 (17.0%)、46～50 歳 30 名 (13.8%)、50 歳以上 15 名 (0.9%) であった。

(2) 歯科衛生士歴 (図 2)

歯科衛生士歴は、1 年未満～1 年 12 名 (5.5%)、2～4 年 30 名 (13.8%)、5～7 年 39 名 (17.9%)、8～10 年 46 名 (21.1%)、11～13 年 25 名 (11.5%)、14～16 年 21 名 (9.6%)、17～19 年 15 名 (6.9%)、20～22 年 16 名 (6.4%)、23 年以上 14 名 (6.4%) であった。

(3) 主な就労場所 (図 3)

主な就労場所は、診療所 158 名 (72.5%)、病院・大学病院 17 名 (17.8%)、行政 6 名 (2.8%)、歯科衛生士教育養成機関 4 名 (1.8%)、介護保険施設等 3 名 (1.4%)、障害者歯科診療所等、社会福祉施設等、地域包括支援センター等がいずれも 1 名 (0.5%)、その他 2 名 (0.9%) で、歯科衛生士として勤務していない者が 25 名 (11.5%) であった。

(4) 主な就労場所で開催している業務内容 (図 4)

X 線撮影 89 名 (40.8%)、歯肉粘膜等への薬物塗布 83 名 (38.1%)、義歯の調製・研磨 72 名 (33.0%)、補綴物の合着 58 名 (26.6%)、口腔ケアプランの作成 45 名 (20.6%)、周術期口腔機能管理 42 名 (19.3%)、全身モニタリング 33 名 (15.1%)、舌圧検査 27 名 (12.4%)、カンファレス等への参加 24 名 (11.0%)、口腔乾燥の検査 23 名 (10.6%)、嚥下機能検査 18 名 (8.3%)、要配慮者への栄養指導 8 名 (3.7 名)、食事介助 2 名 (0.9%) であった。

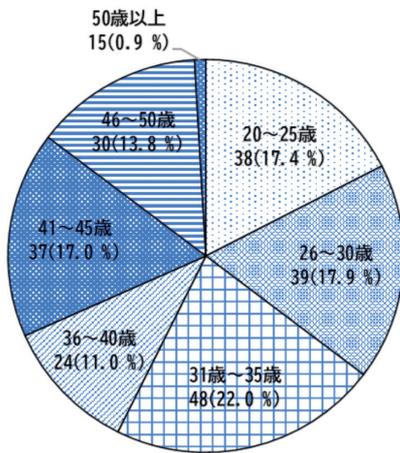


図1 対象者の年齢

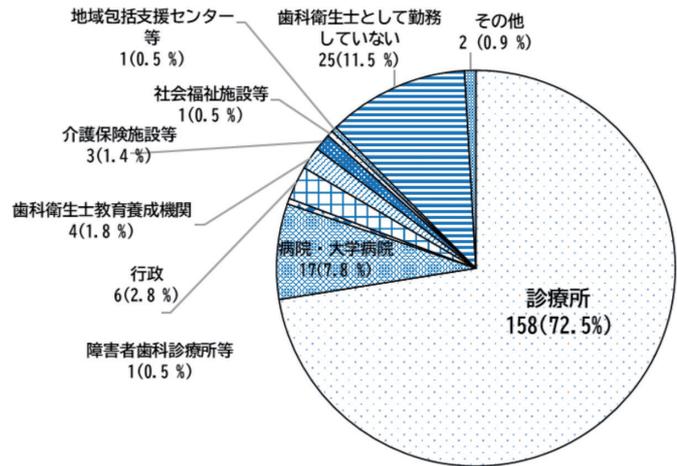


図2 歯科衛生士歴

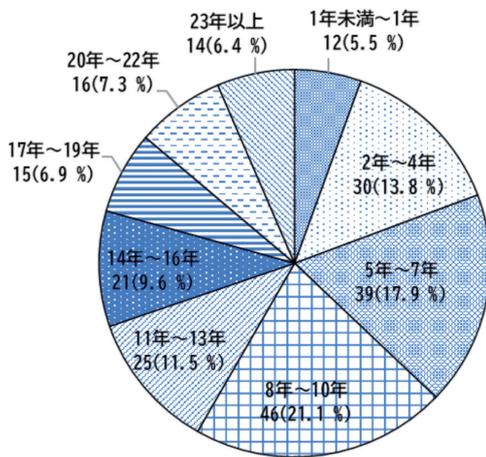


図3 主な就労場所

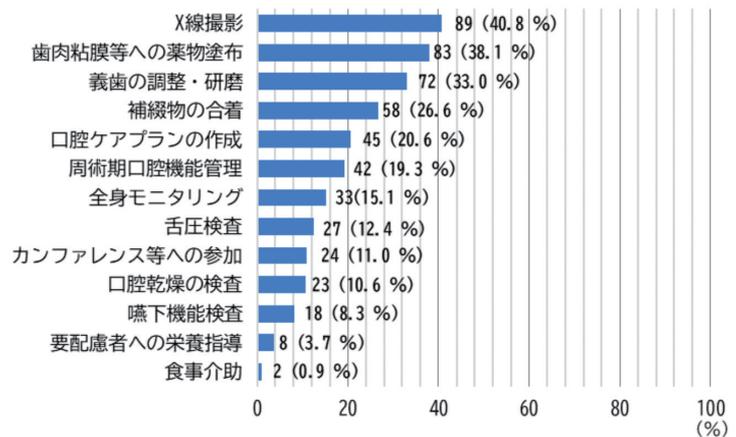


図4 主な就労場所での実施している業務内容（複数回答）

(5) 各業務の実施状況

精密印象採得 112 名 (58.0%)、SRP 時の浸潤麻酔 15 名 (7.8%)、SRP 時以外の浸潤麻酔 19 名 (9.8%)、採血 4 名 (2.1%)、注射 8 名 (4.1%)、口腔機能訓練 75 名 (38.9%)、咽頭部および気管内吸引 19 名 (9.8%)、在宅 (施設・病棟を含む) での口腔ケア 70 名 (36.3%) が実施していた。各業務において実施している者の歯科衛生士歴を表 1 に示す。

(6) 浸潤麻酔の実施状況と自信度、重要度、教育の必要性の認識 (表 2)

重要度、自信度ならびに教育の必要性の認識について、「自信あり」または「やや自信あり」を「自信あり」、「重要」または「やや重要」を「重要」、「必要」または「やや必要」を「必要」とし、それ以外の回答をそれぞれ、「自信なし」、「重要でない」、「必要でない」とし、分析を行った。SRP 時の浸潤麻酔について、「自信あり」とした者は、実施している者 7 名 (46.7%)、実施のない者 5 名 (2.8%)、「重要」とした者は、実施している者 13 名 (86.7%)、実施のない者 71 名 (39.9%) で、いずれも実施している者のほうが、「自信あり」、「重要」と思う者が多かった ($P < 0.01$)。教育の必要性は、「必要」とした者が、実施している者 12 名 (80.0%)、実施のない者 93 名 (52.2%) で、実施している者のほうが「必要」と思う者が多かった ($P < 0.05$)。

表1 各業務の実施状況と歯科衛生士歴のクロス集計

歯科衛生士歴(年)	総数	1	3	4	5	6	7	8	9	10
	n	1年未満~1年	2年~4年	5年~7年	8年~10年	11年~13年	14年~16年	17年~19年	20年~22年	23年以上
精密印象採得	112(58.0%)	8(72.7%)	14(53.8%)	16(55.2%)	26(65.0%)	15(60.0%)	10(55.6%)	4(28.6%)	9(56.3%)	10(71.4%)
SRP時の浸潤麻酔	15(7.8%)	-	2(7.7%)	3(10.3%)	2(5.0%)	1(4.0%)	2(11.1%)	1(7.1%)	4(25.0%)	-
SRP時以外の浸潤麻酔	19(9.8%)	2(18.2%)	4(15.4%)	3(10.3%)	3(7.5%)	2(8.0%)	2(11.1%)	1(7.1%)	2(12.5%)	-
採血	4(2.1%)	1(9.1%)	1(3.8%)	-	-	1(4.0%)	-	-	1(6.3%)	-
注射	8(4.1%)	-	3(11.5%)	1(3.4%)	1(2.5%)	2(8.0%)	-	1(7.1%)	-	-
口腔機能訓練	75(38.9%)	4(36.4%)	9(34.6%)	6(20.7%)	16(40.0%)	8(32.0%)	6(33.3%)	10(71.4%)	10(62.5%)	6(42.9%)
咽頭部及び気管内吸引	19(9.8%)	-	1(3.8%)	4(13.8%)	4(10.0%)	3(12.0%)	1(5.6%)	4(28.6%)	2(12.5%)	-
在宅(施設・病棟を含む)での口腔ケア	70(36.3%)	3(27.3%)	9(34.6%)	9(31.0%)	15(37.5%)	10(40.0%)	6(33.3%)	7(50.0%)	5(31.3%)	6(42.9%)

SRP 時以外の浸潤麻酔について、「自信あり」とした者は、実施している者 3 名 (15.8%)、実施のない者 4 名 (2.3%) で、実施している者のほうが、「自信あり」の者が多かった ($P < 0.01$)。「重要」とした者は、実施している者 12 名 (63.2%)、実施のない者 43 名 (24.7%)、教育の必要性は、「必要」とした者は、実施している者 15 名 (78.9%)、実施のない者 70 名 (40.2%) で、実施している者のほうが「重要」、「必要」と思う者が多かった ($P < 0.01$)。

本研究結果より、歯科衛生士養成機関において、十分な教育を行っていない業務であっても、現在勤務している歯科衛生士は実施している状況であった。また、適否が問われている浸潤麻酔の業務について、実施には全身管理や救急処置について十分な知識と技術が必要となるため、「自信なし」としながらも実施している状況であった。しかし、実施している者は業務を行うことの重要性や今後の教育の必要性を感じている者が多く、さらに調査を続け、今後の卒前、卒後教育内容を検討する必要性が示唆された。

表2 SRP 時の浸潤麻酔、SRP 時以外の浸潤麻酔における自信度、重要度、必要度

	SRP時浸麻		P value	SRP時以外浸麻		P value
	実施の有無	実施の有無		あり(19)	なし(174)	
自信なし	あり(15)	なし(178)	<0.01	あり(19)	なし(174)	<0.05
自信あり	8(53.3%)	173(97.2%)		16(84.2%)	170(97.7%)	
重要でない	7(46.7%)	5(2.8%)	<0.01	3(15.8%)	4(2.3%)	<0.01
重要	2(13.3%)	107(60.1%)		7(36.8%)	131(75.3%)	
必要でない	13(86.7%)	71(39.9%)	<0.05	12(63.2%)	43(24.7%)	<0.01
必要	3(20.0%)	85(47.8%)		4(21.1%)	104(59.8%)	
	12(80.0%)	93(52.2%)		15(78.9%)	70(40.2%)	

成果発表：(予定を含めて口頭発表、学術雑誌など)

本研究の成果は、日本歯科衛生教育学会での発表ならびに論文投稿を行う予定である。